



## 第2章 再生整備基本計画策定的前提

## 1. 阿久根市を取り巻く社会情勢

### ： 少子高齢化と過疎化の進行

◇阿久根市の人口は、市外への流出に加え、少子化による自然減少により一貫して減少傾向にある。平成12年から平成22年度までの10年間では3,116人減少し、23,154人（平成22年国勢調査）となるなど、人口減少の傾向が大きくなっている。このままの推移でいくと、平成37年には、2万人を割り込むことが予測される。

◇さらに、平成17年の高齢者比率は32.7%と高く、高齢者比率が40%を超える区が約半数になっており、特に中山間部の集落において高齢者比率が高い状況にある。

◇このような中、交流人口の増加に向けた取組や、地域社会における地域コミュニティの活性化を図る必要性が高まっており、少子高齢化や人口減少を見据えた都市再生整備を進めることが求められている。

### ： 基幹産業の振興

◇本市の産業構造は、第一次産業を基幹産業としているが、共通して見られる問題として担い手・後継者不足等の深刻な影響などが挙げられる。さらに生産量や漁獲量は減少しており、地域経済低迷の一因となっている。

◇第二次産業は、高速交通体系の遅れから消費地に遠いなど立地条件に不利な面が多いことに加え、グローバル化や昨今の景気悪化の影響も大きく企業誘致や企業立地は進んでいないのが現状である。

◇第三次産業は、就業人口が増大し、就業人口比率も5割を占めている一方で、中心市街地は小規模小売店が多く、消費者の大型店への流出、後継者難などのため、空き店舗が目立つ厳しい状況にある。

◇このような中、地域における担い手の育成や、6次産業の推進、地産地消とブランドPRの活性化策を進めるとともに、新たな観光レクリエーションの創出など、地域が一体となった産業振興の連携が求められている。

### ： 交通体系の整備

◇交通体系は、国道3号、国道389号、県道阿久根東郷線及び市道阿久根出水線が近隣市町を結ぶ幹線道路となっている。将来的には南九州西回り自動車道、北薩横断道路、さらには島原天草長島連絡道路の地域高規格道路がクロスする交流拠点として期待されているが、依然として高速交通体系から取り残されており、空港や高速道路芦北ICまで約90分を要し、トラック輸送、交流促進など産業経済振興の阻害要因となっている。

◇このような中、今後とも高規格幹線道路の早期の全線開通に向けた取組を進めるとともに、おれんじ鉄道やバスなどの公共交通の利用促進策と地域全体の交通連携に取り組むことが求められている。



### ：グローバル化の進展と地域間競争の激化

◇世界経済や高度情報化において国際競争が激化し、人・モノ・情報が国境を越えて交流する一方で、工場の海外移転や安価な輸入品の流入が、地域の産業や雇用に影響を与えている。

◇その一方で、経済のグローバル化の進展に伴う地域間や企業間競争の激化は、国内における産業の立地や景気回復の度合いにも影響を与え、地域間格差や所得格差を拡大させている。その結果、魅力ある都市、地域に人が集まり、人口や資本が流動する地域間競争が生じている。

◇このような中、観光や産業の振興などにおいて、競争力のある魅力ある地域経済や交流の発展、情報発信を進めていくことが求められている。

### ：自立した地域づくりと多様な主体との協働の高まり

◇地方財政が制約される一方で、人々の価値観やライフスタイルの多様化に伴い、住民ニーズも複雑・多様化し、公平・公正が原則の行政サービスだけでは十分に対応できない状況にある。

◇その一方で、近年、ボランティアやNPO、企業などといった個人や団体の社会貢献活動が活発になっており、地域の創意工夫を実現する自立した地域づくりへの意欲や運動が全国で高まっている。

◇このような中、これまで行政が担ってきた公助だけでなく、地域住民やNPO、企業などの多様な主体が、共助や自助を推進し、地域社会の担い手として相互に連携・役割分担を図りながら、地域コミュニティの活性化と地域を支える協働による地域社会を構築することが求められている。

### ：環境問題と環境意識の高まり

◇世界規模での人口増加や大量生産・大量消費・大量廃棄という経済社会活動により、地球温暖化やオゾン層の破壊、生態系の変化といった地球規模での環境問題が生じている。

◇このような中、省資源・省エネルギーに配慮した循環型社会の形成や環境への負荷の少ない持続可能な社会の実現に向けての施策を進めると共に、市民一人ひとりの環境に配慮したライフスタイルへの転換や、地域に根ざした環境教育への取組を進めていくことが求められている。



## 2. 阿久根市の特性と地域資源

### ： 阿久根市の自然環境 -海と山と太陽の恵み-

◇阿久根市の地形は、南北に細長い形状をしており、海岸線の総延長は約40キロメートルで、「日本の名松100選」や「日本の快水浴場100選」に選ばれた阿久根大島など点在する島々の景観は自然豊かで県立自然公園の指定を受けている。過去10年間の平均気温は17.6度と温暖で寒暖の差が小さく、住みやすい気候である。こうした自然環境から、豊かな農産物や魚種に恵まれ、<食のまち阿久根>を支えてきた。

◇また、市街地周囲には、海や里山などの豊かな自然が残されており、身近で多彩な自然環境と触れ合える環境に恵まれている。

◇こうした阿久根に残る美しい自然環境や地域の特色ある景観と快適な生活基盤を両立させながら、自然と調和した潤いある環境を形成していく必要がある。

### ： 阿久根市の歴史資源 -今に伝える歴史と交流文化-

◇阿久根は15世紀末には海外との交易もすでに行われ、古くから「海に拓けたまち」であったことが当時の遺品からもうかがえる。江戸時代には薩摩藩の貿易港として発展し海運業が盛んであった。

◇昭和27年4月に市制を施行し、昭和30年には隣接の三笠町と合併して現在の形態を整えるに至り、平成24年に市制施行60周年を迎えた。

◇また、市街地には、火の神や、海にまつわる社などが多く点在し、江戸時代に繁栄した歴史文化が今なお街の表情として残されている。さらに阿久根七不思議などの昔話や、さまざまな祭りが、伝統や交流文化として市民の間で継承されている。

◇こうした豊かで多彩な歴史資源や祭りや昔話などの伝統文化を大切にしながら、市民の愛着や誇りにもつながる個性あふれるまちづくりや、人づくりを推進する必要がある。

### ： 阿久根市の景観資源 -「まちづくり」から「まち残し」へ-

◇阿久根の豊かな自然環境や、江戸時代に栄えた歴史文化によって阿久根独自の豊かな景観が形成されている。高度成長期における都市の大規模開発や発展からの流れからは取り残されてきたが、その反面、こうした豊かな景観資源が残されており、漁村のまちなみや、美しい自然景観、夕日への眺望点が今なお数多く存在している。

◇このような中、新しい施設づくりを中心とした利便性重視の「まちづくり」を進めるだけでなく、阿久根の魅力的な自然、生活景観を認識し、価値付けし、それを景観資源として、まちの運営に生かしていく「まち残し」としての取組を進め、スローライフや自然体験などの財産として活用していくことが求められている。

